

二〇〇〇年代初頭。名鉄大江駅の奥にある試験場は大勢の家族連れで賑わっていた。HSST。その試験機に乗るためだ。

試験線の距離は短く、片道は大江駅から東築地口駅までの間、たったの一・五キロに過ぎない。それでも多くの人が未体験の技術を体感しようと詰めかけた。

少年少女らの胸は弾んでいた。その大半は、『山梨にあるアレ』とは違うらしいということしか理解できていない。だが、いち早くその技術を体感してみたいという思いが身体を火照らせ、胸の高鳴りは増す一方だった。

たった二両の小さな車両。子供たちは、その小さな箱へ我先にと飛び込んでいき、新鮮な車両の匂いを胸一杯に思いつきり吸い込む。甘いとか辛いとか酸っぱいとか苦いとか、そういうった香りではない。それはとても形容しがたいが、強いて言うならば『グレイな香り』だった。

その小さな箱は一杯になり、空気の抜けるような音と共に扉を閉めた。ちょっとした小旅行の始まりだ。先頭の運転台へ、側面窓へ、後方へ。人が張り付いていく。誰もが目を輝かせ、その出発を待っていた。

そして車両は音もなく滑るように動き出す。ガタンゴトンとレールのつなぎ目を通過する音なんて聞こえない。そう、電車らしい音なんて聞こえないのだ。それはまるで氷の上を滑っているかのようで。とても、なめらかだった。

「すごい……。」

子供たちは口々に感嘆の声を漏らす。その間にも試験機は音もなく速度を上げていく。左右に並んだパイプだらけの工場が後ろへと流れていく。普通の電車と同じようだが、それでも何か違った。何か違ったのだ。

「私、大きくなったら HSST の車掌さんになる！」

一人の少女が満面の笑みと共に宣言した。

あの試乗会の日から半年が過ぎた。試乗会の後に車掌さんになりたいといった少女は、日増しにあの列車の虜になっていった。家が近かったというのもあって、少女はよく HSST の実験線を見に行っていた。もちろん申し込みをしていないから乗れるはずもないが、外から眺めているだけでも、少女の心は満たされるのだった。

そしてそんなある日、少女は実験線を見に行った帰り道に車にはねられた。

少女が車に気付くことも、悲鳴を上げる間も、痛みを感じる事もなかった。それはたった一瞬、たった一瞬の出来事だったのだから。

あのあたりは多くの車が常に行きかう幹線道路が多い。工場も集中していてトラックだっ

て数えきれないぐらい通る。そんなところで小さな少女が一人、よそ見をしたまま道路へ飛び出せばその末路は容易に予想できる。無慈悲なことだが、それは当然のことだった。

私、死んだんだ。

少女は自分自身の身体を俯瞰してそう思う。とても冷静で、取り乱すこともなく。

ああ、私、車掌さんになりたかったなあ。

少女は最期の最期に、誰にも届かない願いをこぼした。

一

中秋の名月の翌日の事、ぼぶかるとエネミイの二人は妖精界にある図書回廊の前庭でお茶会を開いていた。今年の『お月見泥棒』の反省会みたいなものである。

ちなみに、『お月見泥棒』とは日本各地で中秋の名月の日に行われる行事の事だ。子供が地域のご家庭を訪れ、お菓子などを頂戴していくものである。昔は芋畑から自由に―とは言っても半歩までしか入ってはいけないそうだが―芋を取って行かせたという話も一部であるらしい。日本版のハロウィンといった方が分かりやすいだろうか。趣旨自体はまったく違うのだが。

昔はあちこちで行われた行事だが、今や廃れ、どういうものか知る者も少なくはない。農業と生活の関わりが薄れてきたからだろうか。

さておき、長久手ではまだ『お月見泥棒』が行われていた。今年も盛況だったとのことだ。

「今年のお月見泥棒に知らない子がいたって本当の話かしら？」

「本当だそうですね。いえ、本当でしょうね」

「何故そう言い切れるのかしら？」

「私の所にもやってきていたみたいですから」

そう言ってぼぶかるは懐からスツと一つ、月見団子を取り出した。わざわざ丁寧に皿の上に乗せてある。そんなものが入るスペースがはたして懐にあるのかどうかはさておき、とりあえずその団子はぼぶかるお手製の物とのことだった。

「なかなか上手にできたのですよ。エネミイも一ついかが？」

「ただくわ…：美味しいわね…：」

「でしょう？砂糖は控えめですが、素材の味が活きるようにしましたの。材料の一部は私自ら育てたものを使いました」

「…：相変わらず本格的ね…：。で、それがどう『知らない子』の話に繋がるのかしら？」

「今年のお月見泥棒、私はこれをお供たちにあげました。大皿にたくさん載せて、一人一つずつ取って食べるようにさせていたのです。別に対して大きなトラブルはありませんでした。ですが、終わってから妙なことに気が付いたのです。食べていった数と、子供の数が合わない

い、と」

「誰かが二つ食べたのではなくて？」

「ええ。二つ以上食べた子も確かにいましたが、誰が食べたかははっきり覚えていないので違うはずです。私、記憶力には自信があるのですよ」

「じゃあ、一体誰が食べていったのかしら？」

エネミイの問いに、ぼぶかるはしばし考える。誰か怪しい子はいなかったか。知らない子は誰だったのか。ティーカップに入ったほうじ茶を、一口二口すすりながら。ついでに何処から取り出した月見団子を口に放りこんで。

「……今思い返すと、一人、そうじゃないかと思う子はいました。あまりにも自然に周囲に溶け込んでいたのでその場で疑問に思うことはありませんでしたが、あの子は私が知らない子でしたね」

「……思い出したのはいいけれど、何故そこで月見団子を食べたのかしら？お茶を飲むだけならまだ分かるわ、でもー」

「甘いものは頭を働かせるために必要ですわ」

「甘さ控えめだったのでは？」

「団子は炭水化物でできています。立派な糖類の一種ですわ」

「それで本音は？」

「ここで一つ、団子が怖くなったのです」

「月見団子こわい」

二

私は気がつく、『リニモ』の中にいた。最初は見慣れぬ景色に何の中にいるのか分からなかったが、よくよく観察するとそれはあの私が乗ったことのあるHSSJに似ていた。いや、仕組み自体はほぼ同じものだった。たった数ミリ浮上して走行する車体。この滑り具合はよく覚えている。リニモと呼ばれてはいるが、この車体は間違いなく私の愛したものだろう。しかし、私は私を覚えていない。私は誰？

覚えていることと言えば、『HSSJ』の車掌さんになりたい』ということだけ。この場合、リニモの車掌さんだが。

この時間、いや、まだ今は人は乗っていないのだろうか？ 真新しい香りが充満していて、人が利用した気配というのがまるでない。

ああ、そうだ。これはあの実験線の営業路線なんだ。そしてそれがまだ運行が始まる前とということなのね。あの体験試乗会の時に聞いた話の通りだ。

あの体験試乗会の時……？ いつの事だろう？ 私には何もわからない。私は何も知らない。

でも、憧れの車掌さんに似たようなものになれたのだから、それでいいと思えばいいのでしょう。そう思うしかないのも事実だけど。

これから、どうしていきましよう？

どうにでもなるといいけど。

ようやく今日は開通の日だ。私はリニモの隅でお客さんの邪魔にならないようにじっとしていた。しかし胸の高鳴りだけは押さえられるはずもなかった。

滑るように走る車体。詰めかける大勢の客。時折子供達の歓声が聞こえ、リニモもそれに応えるかのように力強く走っていく。うねる地下の街道を、急勾配の上り坂を、大きなカーブを、激しく繰り返すアップダウンを、山と緑が織りなすハーモニーの中を、ジェットコースターのような下り坂を。本当に力強く駆け抜けていく。

そう、これ、これだ。私の体験した、あの記憶。懐かしくて今でも心躍るあの記憶。あれを今、私はこの身で感じているのだ。

昔と違うのは、本当の身体が、肉体がないということ。お客さんは大抵誰一人として私の事に気付かない。気付かないどころか、私にもたれ掛かってくる人もいた。もちろんもたれ掛かってきたところで私の身体に触られるはずもない。私の身体を通過して、リニモの壁面にあたるだけだ。でも、それが私の心を少し寂しくした。本当に私は今幽霊みたいな存在で、生きていると改めて実感させられるからだ。

でも私はそれでも良かった。一人でも多くのお客さんがリニモの事を好きになってくれるなら、喜んでもらえるなら、私の存在など気付いてもらえなくても良かった。

こうして、私の乗るリニモは走り始めた。

今日は三月二十五日。万博の開幕日。大勢の人が押し寄せた。何しろ三十五年ぶりとなる日本での大規模な国際博覧会。誰もが興味を持ち、誰もが未知の世界を覗きたがった。

私はリニモの中からその熱気をひしひしと感じた。もちろん誰もがその存在に賛同しているというわけではなく、上から目線で見に行つてやるといふ人もいたけど、それでもそれも熱気には変わりなかった。

リニモはせっせと会場へと人を運ぶ。藤が丘から万博会場へ。万博会場から万博八草へ。

折り返してさらに万博会場へ、藤が丘へ。せっせっせと運んで行った。

今日の話ではないけど、時には浮上できずにタイヤ走行になることもあった。あまりにも多くのお客さんが詰めかけすぎて、重量オーバーしてしまったのだ。私に身体はないけど、さすがに息苦しかった。でも、それもこれもたくさんの人がリニモに興味を持ってもらえてるということ。それはとても素晴らしいことで、とても素敵なことなんだ。

今日から半年の間、毎日こんなにお客さんに乗ってもらえると思うと、とてもわくわくするなあ……。

あの激しかった半年は過ぎ去っていった。あれはもう遠い過去のように思える。

楽しかった。色んな人の笑顔を運べて、未来へとつなぐ役割が果たせて。とても、とても楽しかった。

でも、今は……。

がらがらの車内。乗る人はまばら。通学通勤の時間帯だともう少し人はいるけど、それでもさすがに少なすぎた。

私が車内で走り回っても、寝転がっても、大声を出しても、泣きわめいても、誰の迷惑にもならない。見えないからというのもあるけど、迷惑をかけてしまうと感じる心さえなくなってしまうぐらいだった。

このままだと、いつかリニモはなくなってしまうのだろうか？ 私の愛しているリニモが、ピーチライナーのように廃線になってしまふのだろうか？

そんなのは嫌だ。そんなのは絶対嫌だ。

でも、もう私には何もすることができなかった。

ただ車掌さんになりたいと願う心だけ抱えて、何もできずリニモの隅で膝を抱えていることしかできなかった。

この前、久しぶりにリニモの外に出てみた。何年ぶりだろうか？夜なのに街に子供の声が響いていたので、気になったのだ。

どうやらそれは『お月見泥棒』をやっていたかららしかった。私はそれを知らなかったが、どうやら日本版のハロウィンみたいなものらしい。仮装はしないようだった。

ふらっと子供達の間混じって見たが、案の定誰も気付かない。私が幽霊だということに。小さい子は私の事が見えるが、見えるから気付かないのだ。お蔭で怖がられたりしなくて済

むのだけど。

お菓子を触るということは難しかったけれど、一応なんとか触ることはできた。だから周りの子供達にも特に不審がられはしなかった。でも、食べる事だけは上手いかなかった。持って帰ってきたお菓子はほとんど食べられずに身体を落ちていくだけ。しかたない、もう死んでしまっているのだから。

ただ、一軒だけ何故か普通にお菓子を食べられるところがあった。それどころか、家の主は私の事が見えているようだった。幽霊だと気付いてはいなかったようだけど。

ああ、あの団子、美味しかったなあ……。

三

「それで、その子はどんな感じだったのかしら？」

「地に足がつかない感じでしたね」

「ふわふわしている？」

「ふわふわしていたんです」

「：・ねえ、その子ってもしかして……」

「幽霊でしょうね」

「それが何であなたのところに来ていたのよ。今は初秋よ。幽霊には似合わない季節だわ」
「似合わないとは失礼ですねえ。その子だってしっかり生きていますですよ。いえ、失礼。しっかり死んでいるのですとすべきでしたか」

うん、確かにあれは死んでいたとぼぶかるは深くうなづく。まあしかしその言い回しはとても奇妙ではあったが。

さておき、幽霊であることは確かなこととして、一つ疑問があった。

「一体どこから来たのでしょうか？」

「どこ、とは？」

「幽霊とはいえ、帰る場所、居着く場所が必要でしょう。それが場所であるか、『人間』であるかは別として」

「……。長久手地域には絞られるわ。アナタの家の周辺で『お月見泥棒』に参加していたというのなら、おそらくこの範囲に『居る』わ」

「割と広い範囲ですねえ」

「しようがないじゃないッ！これ以上範囲の絞りようが無いのよ」

「まあまあ団子でも食べて落ち着きなさいなエネミィ」

そういつてぼぶかるはエネミィの口に月見団子を突っ込んだ。開いた口を塞ぐのにちよう

ど良いサイズのそれを突っ込まれたエネミイにとってはたまったものじゃない。

エネミイは一瞬うろたえたが、食べ物無駄にするわけにはいかなかったし、とても美味しいことは分かっていたのでもぐもぐと咀嚼する。

紅茶をあおり、団子を胃袋へと流し込んで呼吸を整えた。

「なんてことするのよッ！息が詰まるじゃない！」

「糖分が頭に足りていないようでしたので、補給してあげたまでですわ」

ぼぶっ♪と彼女は腹黒く笑う。

「アンタって本当に小悪魔的よね……」

「小悪魔的なほど魅力的なのですよ」

「……」

「まあさておき、長久手なら幸い私の庭みたいなものですし、じっくり腰を据えてさがしてみましようか」

「心当たりはあるのかしら？」

「ないですわ。でもあの子が好みそうな場所なら、何となくわかる気がしたのです」

「どうして？」

「見かけたのが最近であるということ、子犬みたいな無邪気な目をしてたこと、見た目が現在の子供とそう変わりはないこと……。まあ色々ありますが、結局のところ第六感でしょうね」

「結局勘なのッ!？」

四

「おや？ここにいましたか……」

奇妙な和装をした可愛い女の子が、私に話しかけてきた。どうやら私が見えるらしい。大きくなくなってしまった人には見えることはないはずなのに。

それにしてもなんで私に……？あれ、この子、どこかで見覚えがあるような……。

「気づいていたのですよ。少なくとも私は」

「貴方、だあれ？」

「私はぼぶかる。文化の妖精ですわ♪」

ぼぶかる？文化の妖精？私には何が何だか分からない。

「早速だけれど、私と一緒に来てくれないかしら？」

「どこへ？私、あまり遠くへはいけないの」

私はこのリニモから遠くへは行けないようだった。何度か試してみたけれど、リニモの路

線から二km程度が限界だった。それ以上行こうとしても、身体が見えない力に引っ張られて前に進めなくなる。

「知っていますわ。だから、貴方に魔法をかけてあげましょう。とっても、とっても素敵な魔法ですわ♪」

「魔法……？」

「ええ、魔法。簡単な魔法。貴方の存在を認知してもらう。ただそれだけでいいのです。」

「それだけ？ それだけなの？」

「それだけですわ。ただし、少し工夫を施します。萌え化と呼ばれる作法。その一種ですわ♪」

「萌え化……？」

「ええ、萌え化。擬人化、とも呼びますわね。『萌え』というのは誰かがそれを『萌え』だと思ふこと、それだけでそれは『萌え』になるのですよ。」

「それをどうやってするの？」

「そうですね。まずは名前。名前から決めましょう。」

「私、私の名前を覚えていない。私が誰だか分からないの。」

「それでも大丈夫ですわ。名前も記憶も、これから作っていけばいい話なのです。とりあえず、貴方の名前は『リニモたん』にしましょう。可愛らしいでしょ？」

リニモたん。不思議な響きだった。全てを受け入れてくれた目の前のぽぶかるが決めてくれた名前。悪くない。悪くない名前。

「私は、リニモたん。」

私が呟くと、どこからか一塵の風が吹いて、私の心を温かくした。今までの透き通った身体にあった心とは違う、新しい心。

「そう、それでいいのですよ。貴方はいまからリニモたんです。それがこれからの貴方の名前、貴方の抛り所になるでしょう。」

ぽぶっ♪ と笑うぽぶかるが、とても眩しく見える。

「あとは身体、ですね。それだけはもう少し待ちましょう。」

「どうして？」

「リニモたんを愛してくれる人達が、きつと貴方の身体を描いてくれるから。安心しなさいな。そんなに可愛らしい名前を持っているのですから、きつとすぐに描いてもらえますわ♪」

そして、ぽぶかるは私の手を引いて私をリニモの外へと連れ出す。その力強さに驚きながらも、頼もしさを感じるのだった。

「これが、今の世界。今の愛知ですわ♪」

私はこれから、どう変わっていくのだろうか？あの懐かしい胸の高鳴りを、また感じた。

「しゅいーん☆お月見泥棒でーす」

元気な声がぼぶかるの家に投げ込まれる。幽霊の少女改め、リニモたんだった。

彼女は今、昔と違う身体を与えられていた。きらりと光る腰ほどまである長く青い髪。それをツインテールにしてまとめている。青を基調とした未来的な服で身を包む様は、まるでリニモのイメージそのものだった。いや、イメージというよりかは、憧れ、だろう。

「ああ、リニモたん。待っていましたよ」

ぼぶかるはエプロン姿で彼女を出迎えた。片手に大量の月見団子が載った大皿を持ち、もう片手にはお菓子の詰め合わせを器用に持っていた。

「さあ、これを食べていきなさいな。たくさん用意したから遠慮せずに好きなだけどうぞ。あ、こっちの詰め合わせはお持ち帰り用ですわ」

「わあ、たくさんのお団子！それにこの詰め合わせ、リニモなかも入ってる！ありがとう、ぼぶかる先輩っ！」

リニモたんは頭から生やした青い二本の尻尾を無邪気にバタバタと振っていた。まるで子犬のように。

「喜んでもらえて嬉しいですわ」

ぼぶかるは優しく微笑む。この子を見つけ出して良かったと、心の中で呟いて。

「あ、エネミイ先輩っ！」

エネミイが玄関から居間へと続く通路の影に隠れているのを見つけたようだ。まさか見つかるとは思っていなかったので、エネミイは少し驚く。

「…：何でここにいる事が分かったのかしら？」

「そこに鏡があるから丸見えだったの！」

ふと振り返ると、そこに姿見があった。下の方に『背後に注意ですわ』と書いたメモが貼られている。どう考えてもぼぶかるの仕業だった。

「ぼぶかる…：ッ！」

「まあまあ落ち着きなさいな。可愛い後輩がいるというのに喧嘩というのはいただけませんよ」

「アナタがこんなことするのがいけないのよッ！」

「まあまあこれでも食べなさいな」

いつかのあの日のように、エネミイはまた団子を口に突っ込まれた。これでしばらくは静かに咀嚼するしかないようだ。

「ところでぽぶかる先輩。去年、これが普通に食べられたけどどうして？あの時の私は触ることはできても食べることはできなかったのに」

リニモたんはここ一年程疑問になっていたことを聞いてみた。色々あって聞く機会を逃していたためか、リニモたんも忘れてしまっていたのだ。団子を見て思い出すまでは。

「ああ、それはきつとここが特別な場所だからですわ」

「特別な場所？」

「ええ。ここは確かに長久手ですが、私の家は『妖精界』に属しているのですよ」

「？」

「簡単に言うと、ここだけ周りと世界が違います。妖精や超自然的な存在を許容する世界になっていくのです。だからでしょうね。幽霊でもこの家だけは実体化できたのでしょう」

「ああ、だから食べることができたんだ……」

ようやく疑問に思っていたことが腑に落ち、リニモたんはほっと一つ息をついた。そして、もう一つ、あることを思い出す。ああ、そういえば私はまだ言っていなかった、と。

「ごちそうさまでした。とても、美味しかったです」

「お粗末様でした」

「さて、今年のは『ぽぶかる』はどうでしたか？」

「楽しかったよ！」

リニモたんはあの楽しかった日を思い出して笑う。初めてたくさんの人と触れ合ったあの日、皆に受け入れてもらったあの日のことを。

「なら良かったですわ。でも、ここで終わりではないですからね。来年も、再来年も『聖地化』を目指して集うのです。あのモリコロパークに」

「本当にいつまでも続くという保証があるのかしら？」

エネミイは団子を無事飲み込み終えたようで、会話に加わってきた。

「無いですわ。でも、やれる限りはやらなければなりません。それが、私の為であり、この愛知のためであり、何より、リニモたんの為でもあるのですから」

「私の、為？」

「そうですわ。これは、本当は貴方のためのイベントなのですから。いえ、貴方の好きなモノの為のもの言った方がしっくり来るでしょうね」

「ということは……」

「そう、リニモのため」

あのイベントはリニモの活性化のためでもあったからだ。利用者が少なくなったあのリニモに、再び人を取り戻すための苦肉の策だった。成功する保証など無かったが、何とか今まで良い結果をだしてきた。

だから、もし、結果が出なくなれば、このイベントは無くなってしまう。

その事実には付き、リニモたんは少し身を硬くする。

「そう硬くなる必要はありません。楽しいことが一番です。貴方が楽しまなければ、周りの人も楽しんでもらえないでしょう」

彼女の存在は、誰も彼もに力を与えていたのだから。彼女の笑顔が、人々を幸せにしていたのだから。

「では、これからも一緒に『聖地化』していきましょうか」

「しゅいーん☆」

彼女等のモノガタリはまだ始まったばかりだ。